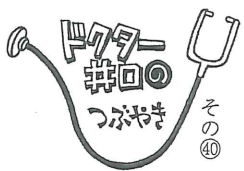


井口昭久教授の随筆が掲載されました。

あじふのび 十二月号（東海志匠の会）



十七歳の映画

井口昭久

コスモスが咲く頃になると、高校の同窓会開催の案内葉書が届く。同窓生の一割ほどが死んでいる。親友であったA君は同窓生の中で一番早く亡くなった。故郷を離れて東京へ出て働き始めたばかりの時に、どうしたわけか踏切の真ん中で車が動かなくなって死んでしまったと聞いていた。

私たちの卒業した高校は天竜川の西側の丘の上にある。

私は天竜川の東から自転車で学校へ通った。川沿いには人家はなく田圃で農作業をしている人がいるだけで、人とすれ違うことはなかった。自転車一台で道を占めてしまう狭い

道にはタンポポが咲き、秋にはススキがそよいだ。

田圃では田植え、稲刈りが毎年繰り返されていた。私たちの生活は天竜川の流れのようにいつまでも変わらないと思っていたが、今から思えばわずかな期間の青春であった。

山の奥から通っていたA君も自転車で通っていた。たびたび遅刻をした。先生に「何故遅刻をするのか!!」と問い詰められると、「僕の家は太陽の出るのが遅い」と答えた。彼の家は天竜川の東の山の陰った集落にあった。

天竜川沿いに電気館という映画館があった。

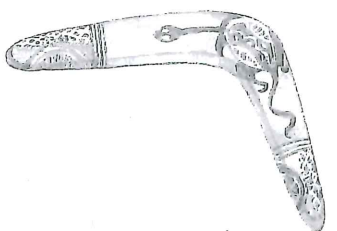
気持ちよかった。

A君と一緒に天竜川の土手を自転車で走った。ただ二人で自転車を漕ぐだけで楽しかった。私は彼が死んでから二年後の秋に生家を訪ねた。彼の死因は自殺であったと警察から知らされたという。

しかし息子は自殺などする子ではなかったと父親は言った。私は、彼はきつと都会の真ん中の踏切で、どっちへ進んでよいか分からぬままに動けなくなってしまったのだらうと思った。

ひとり息子がなくなった家の庭には、紅く染まった柿の葉が散っていた。

（愛知淑徳大学教授・名古屋大学名誉教授）



ブーメラン（オーストラリア・アボリジニ）

私はA君を誘い、授業をさぼって映画を見た。私が悪いことをするときはいつも彼を誘った。映画館に入る時には誰かに見張られているような気がしてスリリングであった。二人で密かに忍び込んで座席に座ると、多くの場合、時代劇をやっていた。例えば大川橋蔵の新十番勝負だったりした。その当時の映画はいつも途中から入場した。夢を見るように、映画の世界へ入ってゆくのだった。途中から見ても物語の展開は理解できた。

格好いい大川橋蔵が、悪人にいじめられた後でやつつけるのだ。橋蔵の頬は赤ん坊のようににふくらんとしていてほんのりと紅く端正な顔立ちをしていた。新十番勝負の新吾は正義の味方で優しく頭が良かった。そして匂い立つような女優との恋が絡むのだった。女優の艶やかな肉体が画面いっぱい展開されると不良になったような気分になった。

映画館を出ると夕闇が迫っていた。天竜川沿いにはススキがそよぎ、風は火照った頬に